

幼児期の歌唱表現におけるテンポの影響について  
－音程の正確さとテンポとの関連－

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梅村, 憲子, 大山, 宮和瑚 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/00028776">http://hdl.handle.net/10098/00028776</a>

# 幼児期の歌唱表現におけるテンポの影響について

## －音程の正確さとテンポとの関連－

福井大学教育学部 梅村 憲子

奈良佐保短期大学地域こども学科 大山 宮和瑚

こども園、幼稚園、保育園などにおける歌唱の時間は、多くの場合先生たちの鍵盤の伴奏によって子ども達が歌うという形であり、子ども達がどのように歌うのかは先生の鍵盤のリードが大きく関与している。中でもテンポは伴奏のテンポがすなわち歌のテンポとなる。幼児と雖も歌う力の向上は歌唱指導の目標の一つであるが、歌う力には音程の正しさも含まれることは言うまでもない。本論文では幼児の歌唱においてテンポがその音程にどのように影響するのかについて、福井大学教育学部附属幼稚園年長児の実際の歌唱を採取、分析した結果をもとに考察した。

キーワード：表現領域（音楽）、幼児歌唱、歌唱テンポ、幼稚園教諭養成

### I. はじめに

幼稚園教諭及び保育士養成（以後幼稚園教諭など）における音楽実技の演習科目では、「適切なテンポ」をルーブリック評価項目の一つに定めているケースが多い。教員採用試験等の音楽実技科目の評価基準についても、また同様である。

教員採用試験の一例としては、「既定の速度で止まらずに弾き切る」（H31 年度福井県小学校キーボード演奏）、「曲にあった速さで、なめらかに演奏し、豊かに表現する事ができる」（H30 年度広島県小学校オルガン演奏）など、鍵盤楽器を用いた音楽実技の評価基準として、テンポについての記述を見ることができる。

前述の例のうち福井県小学校の教員採用試験については、「既定の速度」と記されており、その基準は明確である。だが、多くの場合テンポに関する評価基準は曖昧で、何を以て「適切」とするのかは、すべての年代を通して音楽教育における課題であると同時に、明確な答えを求めるとの難しい問題である。

しかし、年齢が低ければ低いほど、子ども達の歌唱は指導者の考えや音楽的に追う部分が多いことは明らかであり、保育や幼児教育の現場においては、指導者による

適切なテンポの設定が、子ども達の歌に大きな影響を持つことは必至である。

では、保育や幼児教育の現場での音楽指導においては、何を以て「適切なテンポ」と定義すれば良いのだろうか。

例えば、作曲者が絶対的なテンポを指定している場合は、「適切なテンポ」を「作曲者の意図したテンポ」と捉えることもできる。しかしながら、作曲年代によっては、メトロノームの精度について期待を持ってない。さらに、1日のうちの時間帯に作曲されたかによって、作曲家自身のテンポ感にズレが生じることも考えられるだろう。

さらに、子どもが歌うことを想定して編纂された楽譜集についてはどうだろうか。こういった楽譜集では、編者がテンポを指定する場合が少なからずある。しかしながら、何を意図してそのテンポが指定されたのか、そのテンポが本当に適切なのかという議論と検証は、常に行われるべきだろう。

このように、テンポは非常に曖昧で評価の難しい要素の一つではあるが、「適切なテンポ」を考えるうえでの指針として、本研究では「こどもが正しい音程やリズムで歌え

る」という点に着目した。幼稚園、こども園での音楽活動においては、子どもたちが音楽を楽しむだけでなく、正しく歌えること、演奏できることは見逃す事のできない側面である。

井口<sup>1</sup>は『最新・幼児の音楽教育』において次の様に述べている。(引用中の下線は筆者)

一斉に、歌ったり楽器を用いた経験を与える事も、幼児にとっては必要な「環境」だと考えられる。これは、そのような経験を繰り返すことを通じて音楽を覚える場でもあり、その経験がなされた場所の音の環境、全体の雰囲気も彼らの心に働きかける環境だからである。<sup>2</sup> (後略)

まだ楽譜を読めない幼児たちは、日々の活動の中で経験的に歌を覚える。子ども達ができるだけ正しい音程やリズムで歌えるように環境を整える、すなわち、子ども達が正しい楽曲の形を覚えられるように、適切なテンポで歌える様に仕向けることは、保育者には必ず必要なスキルとなる。さらに井口は次のようにも述べている。

大人が一つの歌を伝えるという事の責任は重大である。歌を覚え、親しんで繰り返し口ずさみ、時には他の人と声をあわせることは、我々大人にとっても快い経験である。それが、他の人にも伝わり、親から子へ伝わり、時代を超えて歌い継がれることによって、音楽的文化が形成されていくのである。幼児に歌を教えるということは、まさに、文化の継承である。<sup>3</sup>

幼稚園やこども園で子ども達が歌を覚えるという行為は、保育の場だけで完結するものではなく、音楽文化の継承という意味も持つ。それは小学校以降の教科としての音楽科が目指している「生涯にわたり音楽文化に親しむ態度を育む」<sup>4</sup>ことにつながると言える。

であれば、子ども達が幼稚園やこども園で人生で最初にお友達と声を合わせて楽しく歌う歌は、指導者や園の都合

でだんだんとデフォルメされていってしまうのではなく、できるだけ楽曲の正しい形で、子ども達に記憶され、歌い継がれるものであって欲しい。

それらを実現する手助けとして、本研究では幼稚園児の歌唱における適切なテンポを知る手掛かりを知るべく、テンポの違いがどのように音程に反映されるかに着目して分析を行った。リズムについては今回の調査ではテンポによる大きな差異は認められなかったため、今回の分析の対象とはしないこととした。

## II. 実施方法

実施日：第1回目 2019年11月29日(金)

第2回目 2019年12月11日(水)

第3回目 2020年1月16日(木)

実施時間：15:30-16:00(預かり保育時)

実施場所：福井大学教育学部附属幼稚園

対象者：5歳児のべ18名(月齢5歳10か月-6歳8か月)

課題曲：

A《さんぼ》《となりのトトロ》より 中川李枝子/作詞  
久石譲/作曲

B《きらきら星》 フランス民謡 武廣悦子/日本語歌詞  
松山祐士/編曲

方法：両課題曲にそれぞれ相対的に異なる3種類のテンポを設定し、課題曲Aでは7か所、課題曲Bでは4か所について、電子ピアノの伴奏により正確な音程で歌唱できているかどうかを判定する。

留意事項：出来るだけ条件を揃えるため、演奏時は常時電子メトロノームを稼働させて伴奏にテンポの揺れが生じないようにした。また、あらかじめ附属幼稚園教諭がホワイトボードに歌詞を大きく書いておき、園児はそれを見ながら歌うこととした。園児にはどんなテンポかを知らせずに演奏を開始する。それぞれの課題曲に設定したテンポと

<sup>1</sup> 井口太(いぐちとおる)東京学芸大学教育学部教授(教育学)

<sup>2</sup> 井口2018,p.19

<sup>3</sup> 井口2018,p.21

<sup>4</sup> H29年告示小学校学習指導要領音楽編 p.6

判定箇所は、次のとおりである。

【課題曲 A：さんぼ】(C dur)

楽譜の指定：Tempo di Marcia ♩=120

設定テンポ(♩=)：速い 140、中庸 120、遅い 110

判定箇所：①-⑦

- ①3小節目：1オクターブ(c<sub>1</sub>-c<sub>2</sub>)の上行形アルペジオ
- ②4小節目：スウィングのリズムを伴う4回の同音反復
- ③7小節目：全音音程の反復
- ④9小節目：フラット音(as<sub>1</sub>)(CからFmへの転調)
- ⑤10小節目：半音下行(as<sub>1</sub>-g<sub>1</sub>)(FmからCへの転調)
- ⑥13小節目：オクターブの上行形跳躍(c<sub>1</sub>-c<sub>2</sub>)
- ⑦17小節目：付点を伴う c<sub>2</sub>-h<sub>1</sub>-c<sub>2</sub>-g<sub>1</sub>-e<sub>1</sub>-c<sub>2</sub>-h<sub>1</sub>の一連の音形

譜例1【さんぼ】中川李枝子/作詞 久石譲/作曲

(旋律のみ)

あ る こ う あ る こ う わ た し は げ ん き  
あ る く の - だ い す き ど ん ど ん い こ う  
さ か み ち - ト ン ネ ル - く さ っ ば ら -  
い っ ぽ ん ぼ し に - で こ ぼ こ じ ゃ り み ち  
く も の す く ぐ っ て - く だ り み ち

【課題曲 B：きらきら星】(F dur)

楽譜の指定：Moderato(さやしく、きれいに)

設定テンポ(♩=)：速い 170、中庸 130、遅い 100

(この楽曲は八分音符が小節内に均等に配置されているためテンポを八分音符で設定したが、四分音符に換算すると♩=65となり、Moderatoの指定に沿ったものとなる)

判定箇所：①-④

- ①1小節目：完全5度上行(f<sub>1</sub>-c<sub>2</sub>)
- ②2小節目：高い音(d<sub>2</sub>)の同音反復
- ③3-4小節目：同音反復を伴う半音の下行形(b<sub>1</sub>-a<sub>1</sub>)

- ④5-6小節目、7-8小節目：高い音から同音反復を伴い順次進行で完全4度下行し、もう1度高い音に戻る(c<sub>1</sub>-b<sub>1</sub>-a<sub>1</sub>-g<sub>1</sub>, c<sub>1</sub>-b<sub>1</sub>-a<sub>1</sub>-g<sub>1</sub>)

譜例2【きらきら星】フランス民謡 武廣悦子/日本語歌

詞 松山祐士/編曲(旋律のみ)

Moderato

1.2 き ら き ら ひ か る お そ ら の ほ し よ  
ま ぼ た き し う て は み と な く と き み て る  
み ん な の う た が と ど な く と い い な  
き ら き ら ひ か る お そ ら の ほ し よ

### III. 結果と考察

聴取した結果は以下の通りである。

- ：該当箇所の音程が正しく取れている
- △：音程はほぼ正しい。又は1部分正しい
- ×：該当箇所の音程は取れていない

※《さんぼ》と《きらきら星》の被験者は重複している者もあるが延べ人数を示した。

表1《さんぼ》聴取結果

園児	テンポ	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
A	速い	×	×	×	△	○	×	×
	中庸	△	△	○	○	○	△	×
	遅い	○	○	○	○	○	△	×
B	速い	×	×	×	×	×	×	×
	中庸	×	×	×	○	○	×	×
	遅い	△	×	×	×	○	×	×
C	速い	○	○	○	○	○	△	△
	中庸	○	○	○	○	○	○	○
	遅い	○	○	○	○	○	△	△

D	速い	×	×	×	○	○	△	×
	中庸	×	△	△	×	○	△	△
	遅い	△	△	△	○	○	△	△
F	速い	△	○	○	○	○	△	×
	中庸	○	○	○	○	○	△	△
	遅い	○	○	○	○	○	○	△
J	速い	△	○	○	○	○	△	△
	中庸	○	○	○	○	○	○	△
	遅い	○	○	○	○	○	○	○
L	速い	△	×	×	×	×	×	×
	中庸	×	×	×	×	×	×	×
	遅い	×	×	×	×	○	×	×
N	速い	○	○	○	○	○	○	△
	中庸	○	○	○	○	○	○	○
	遅い	○	○	○	○	○	○	○

G	速い	△	○	○	×
	中庸	△	○	○	○
	遅い	△	○	○	○
K	速い	×	×	×	×
	中庸	×	×	×	△
	遅い	×	×	×	×

以上の結果を踏まえ、○、△、×をスコア化したものが、次のグラフである。課題曲2曲とも、概ね中庸と遅いテンポの方が速いテンポよりも良い結果を得られたといえる。

表 2 《きらきら星》聴取結果

園児	テンポ	①	②	③	④
		速い	×	×	×
A	中庸	×	×	×	×
	遅い	×	×	×	×
	速い	×	×	×	×
B	中庸	×	×	×	△
	遅い	×	×	×	×
	速い	×	×	×	△
C	中庸	×	×	△	○
	遅い	○	○	○	○
	速い	×	×	×	×
D	中庸	×	×	×	×
	遅い	×	×	×	×
	速い	△	○	○	○
E	中庸	○	○	○	○
	遅い	△	○	○	○

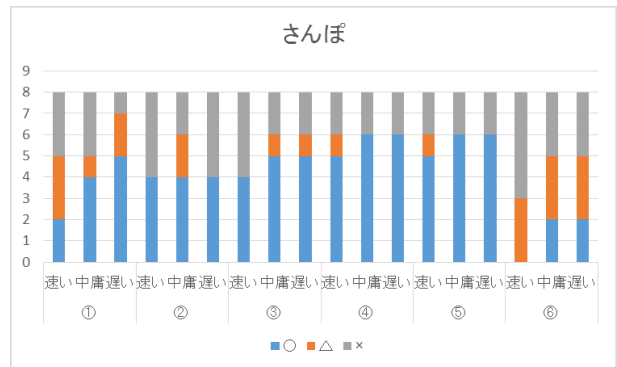


図 1 《さんぼ》聴取結果のグラフ

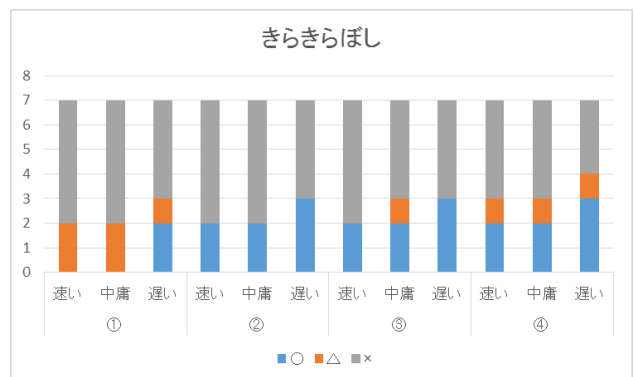


図 2 《きらきら星》聴取結果のグラフ

今回の計測結果によると、歌の音程に関しては、園児たちは遅いテンポで歌った時が最も正確であった。演奏技術を修得するうえでは「ゆっくり、正しく、丁寧に」練習を行うことは基本中の基本であるが、幼い子どもの歌唱についても同様に、ややゆっくり、丁寧に歌うことが正しい楽

曲の形を示すことが明らかになった。

#### IV. 結論

本研究では、「幼児が正しい音程を取りやすいテンポ」を「適切なテンポ」と提起し、検証を行った。しかし、保育の現場では教える側が演奏技術を修得すると、知らず知らずのうちに速いテンポで弾いてしまいがちになるケースは多々見られる。また、速いテンポで演奏した時、子どもたちが生き生きと元気に歌っているような錯覚に陥る場合もある。その結果、時には作曲者の意図せぬようにメロディラインが変化してしまうことも考えられるだろう。

《どうさん》《おつかいありさん》など、秀逸な子どものための歌を多く作曲した團伊玖磨<sup>5</sup>は自身が編纂した『團伊玖磨選集』で次のように述べている

子供のうたは、小さな可愛い心に愛されて、口から耳へ伝わって行けばよいのだと思っていた。(中略)ただ、そうこうするうちに、(中略)耳から耳へ伝わっていくうちに間違った旋律が流布するのを聞くことがあるようになりました。そこで、原典を蒐めて曲集を編むことにしたのです。<sup>6</sup>

多くの場合、幼児は保育者の模範唱とピアノ伴奏を聴き、1フレーズずつ反復練習をすることで歌を習得する。團伊玖磨のこの言葉は、保育や幼児教育の現場における歌唱活動の大きなヒントになるだろう。

團に代表されるようなクラシックの作曲家が子どものための歌を多く作曲していることは、欧米諸国ではほぼ例がない。その事実も園児たちに作曲家の意図した楽曲の正しい姿を示すことが一層重要となる要因である。

もちろん、本研究は幼児の歌を型にはめ「正しい音程とリズムでうたわなはいけない」といった指導を推進するものではないし、伝承によって少しずつ形を変えていくわらべうたなどは、子どもの姿に合わせて変化していくこと

にこそ価値があることには異論がない。

井口は幼児の音楽指導について、次の様な警鐘を鳴らしている。

幼稚園教育要領の精神からすれば、特別な技術指導をして、音楽的な作品の完成度を求めるような活動は、幼稚園での活動の範囲を超えるものである。また、小学校の教科の指導のような展開は、幼児にふさわしいものではないし、音楽によって一定の反応を条件づけるといった訓練は決して自発的な活動を高めるものではない。<sup>7</sup>

さらに井口は次のような例を挙げている。

- ・演技時間が連続して12分29秒にも及ぶ幼児の鼓笛隊(テンポは平均して1分間に143拍)。
  - ・上手く吹けない園児のハーモニカにセロハンテープを貼って音が出ないようにして、形だけみんなと一緒に吹いているように見せた。
  - ・(叩いても音が出ないように)カステネットの中に線をいれておいた。
  - ・1時間近く、指導者の言葉による指示とピアノで子供が動かされ、一定の動き以外は待つように指示され、音に反応して自由に手を打った幼児が動きを制止されていた。
- このような活動は幼児にとって過酷であり、差別的であって(中略)けっして許されるべきものではない。<sup>8</sup>(括弧内は筆者補筆)

井口の言葉を待たずとも、幼稚園やこども園での歌唱表現で最も大切なことは、歌によって子ども達の心が育つことにある。そのためにも、こども達がのびやかに歌うことができ、尚且つ作曲者の意図を汲んだ演奏を目指せるよう、指導者自身が「適切なテンポ」を見極め、そのテンポでの伴奏や弾き歌いが可能となる様に鍵盤演奏技術の力量をつけていかななくてはならない。

<sup>5</sup> 團伊玖磨(だんい くま 1924-2001) 日本を代表する作曲家。オペラや交響曲の傍ら多くの子どものための歌を作曲し自薦の『團伊玖磨選集』には72曲を収録。

<sup>6</sup> 團 2018, pp.2-3

<sup>7</sup> 井口 2018, p.20

<sup>8</sup> 井口 2018, pp.20-21 より抜粋

H29 年制定の幼稚園教育要領の「表現」領域には次のように示されている。

〔感じた事や考えた事を自分なりに表現する事を通して、豊かな完成や表現する力を養い、創造性を豊かにする〕<sup>9</sup>

上記に続く表現領域の記述の中で使われる特徴的な言葉として、以下のものが挙げられている。

「豊かな感性」3回

「豊か」2回

「楽しむ」「楽しさを味わう」8回

「感じる」3回

「心を動かす」「感動」各1回

以上の様な言葉は他領域には見られず表現領域にのみ求められているものである。さらに、3、内容の取扱い では以下の様に述べている。(アンダーバーは筆者)

(1)豊かな感性は、身近な環境と充分に関わる中で、美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々な表現することなどを通してやしなわれるようにすること。(後略)

10

歌唱においては楽曲の持つ、美しく優れた姿を子ども達に示す事が必要となるであろうし、楽曲の正しい姿を示せてこそ、その曲のよさが感受可能となる。

もとより表現領域(音楽)の学びが子どもたちの発達に大きく寄与することを考えると、幼稚園教諭等養成における鍵盤実技や弾き歌い指導の充実の必要性は高いと言えよう。

今回の調査では、《さんぼ》《きらきら星》ともに、遅めのテンポで歌う時に最も音程を正しく歌えるということ

が明らかになった。この結果が、幼稚園や保育園、こども園での歌唱指導指針の一助となれば幸いである。

本研究では調査対象を5歳児に絞ったが、今後、幼児期の発育発達段階毎に調査を重ねる必要があろう。

また、本研究を発展させるものとして子どもにとって歌唱の難易度が高い音程や、その理由の検証をも行いたい。これは、歌唱が平易であると思われた《きらきら星》について、結果が思いのほか奮わなかったからである。一方、難易度が高いと思われた《さんぼ》では、特に転調部分の正確性が高く、こちらもまた予測していた結果とは異なった。

昨年度はコロナ禍により、残念ながら保育現場での調査は叶わなかった。しかしながら、今後も研究を継続する中で子どもの歌唱についての様々な要素を検証し、保育現場での表現領域(音楽)の充実と幼稚園教諭等の養成における実技指導の指針を示していきたいと考えている。

謝意

本研究のために、多忙な時間を割いてご協力くださった福井大学教育学部附属幼稚園の先生方、ご協力くださった保護者の皆様、一生懸命元気な歌声を聞かせてくれた園児たちにこの場を借りて心から御礼申し上げます。

引用文献

井口太 編著『最新・幼児の音楽教育 幼児教育教員・保育士養成のための音楽的表現の指導』2018 朝日出版  
團伊玖磨 『現代こどもの歌 秀作選 ぞうさん 團伊玖磨 選集』2018 カワイ出版

平成29年告示小学校学習指導要領音楽編 p.6

参考文献

坂井康子他『子どもの歌唱におけるフレーズの長さとおつきについて』2002 神戸大学発達科学部紀要,9(2):39-46  
梶川祥世他『母親による対幼児歌唱のテンポに関わる要因』

<sup>9</sup> H29 年制定幼稚園教育要領第2章ねらい及び内容 表現

<sup>10</sup> H29 年制定幼稚園教育要領第2章ねらい及び内容 表現3内容の取扱い(抜粋)

2018 日本心理学会第 82 回大会

**On the influence of tempo on the Vocal Expression at an infant age**

**- The relationship between pitch and tempo -**

Noriko UMEMURA, Miwako OYAMA

Keywords: Section of expression(Music), Toddler singing, Singing tempo, Education of kindergarten teacher